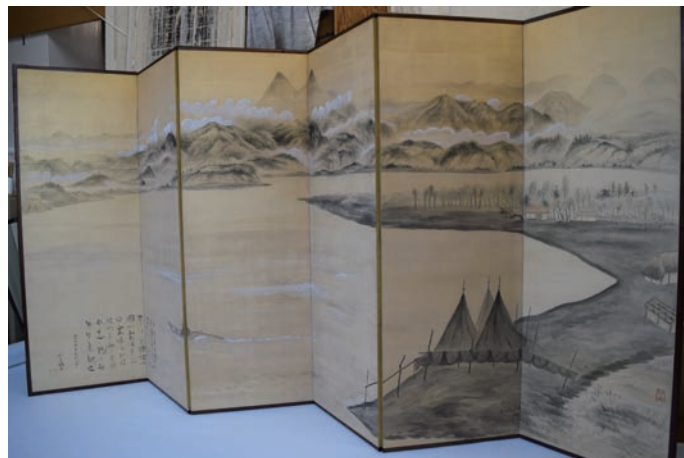


133. 小川芋銭「江村六月、雲巒烟水」修復事業

茨城県近代美術館 館長 荒屋鋪 透

<修復前>



小川芋銭「江村六月・雲巒烟水」

各 156.6 × 330cm

茨城県

解説

本作は、明治から昭和期にかけて活躍した日本画家・小川芋銭が最晩年に手がけた代表作の一つである。芋銭は、本作において、茨城の筑波山や常陸国にかつて存在した湖を取り合わせ、自身の夢の中に出てきた想像の湖を重ねて描いている。こうした空想と現実の融合は、中国や日本の古典等から様々な知識をたくわえながら、河童伝説の残る牛久沼の地で自然を見つめ続けた芋銭の真骨頂だといえる。

しかし、画面に浮き、亀裂、汚れなどが多く発生しており、このまま放置すればさらに劣化が進行する恐れがあった。早急に修復を施したことで、展示公開および調査研究を長きにわたって行うことを可能とし、今後も広く文化に貢献する役割が期待される。

<修復後>



修復業者
泰清堂

修復内容

本作は経年により、下地の痩せによる隅シカミ、蝶番部（特に奥オゼ）の損傷による料絹の亀裂や本紙の浮きが見られ、開閉時に折れやたわみが生じていた。裏箔の肌裏打ちには細かな浮きがあり、本紙にはシミ汚れも確認されたほか、前オゼの化粧絵絹の亀裂や裏貼絹紐の破損など表装全体の劣化が進行していた。これらの損傷の進行を防ぐため、屏風装を全面解体する修理を実施した。縁木は修理して再使用し下地は新調、本紙の清浄、剥落止め、裏打ち・増裏打ちを行い新調下地に張り込んだ。最後に補彩と蝶番部の化粧貼りを施して組み立て、各隻に中性紙製保存箱を新調した。

作品修理報告書

泰清堂

《作品概要》

修理対象作品 ; 小川芋銭 筆『江村六月・雲巒烟水』
修理作品形態 ; 絹本(裏箔)墨画淡彩・六曲一双屏風
修理前作品寸法 ; (右隻・左隻) 立 156.6 cm x 巾 55.0(x6 扇)cm
修理後作品寸法 ; (右隻) 立 156.3 cm x 巾 55.4(x6 扇)cm
(左隻) 立 156.1 cm x 巾 55.4(x6 扇)cm
修理後保存箱 ; 中性紙製保存箱(各隻)

《作品損傷状況》

- ・下地が痩せたためか、隅シカミが生じている部分がある。
- ・蝶番(特に奥オゼ)部分が傷み、料絹が亀裂して本紙が浮いており、屏風を閉じた際の折れと、浮いた箇所からたわみが生じているところがある。
- ・斜光観察により、裏箔の肌裏打ちに細かい浮き(豆浮き)があることが分かる。
- ・本紙に、所々茶色いシミ汚れが生じている。
- ・前オゼ部分の化粧絵絹が亀裂し、糊離れしたり折れたり擦れている。
- ・裏貼の絹紐が擦れて破れており、傷んでいる。



[蝶番(特に奥オゼ)部分の傷み]



[料絹の豆浮き]

《修理目的と修理方針》

＊蝶番部分で料絹の亀裂や折れ・畳みジワが顕著に発生しており、屏風の開閉により傷み(主に亀裂)が進行する可能性が高い。全面解体をとまなう本格修理を行うことで、今後の展示・活用での取扱において作品への安全性を向上することを修理目的とする。

＊＊修理方針としては、担当学芸員と協議しながら作業を進め、修理において可逆性のある材料を使用する。

屏風装を全面解体して修理を進めるが、肌裏打ちについては、裏箔との接着状態を確認したうえで、旧肌裏の除去をするか否かは、充分検討する。

屏風下地・裏張りの絹紐は新調し、縁木・隅金物は元のモノを修理・補填して再使用することとする。

修理後は、各隻に中性紙製保存箱と収納袋を作製し、収納する。

《修理作業工程》

1. 修理前の調査・記録(写真撮影など)

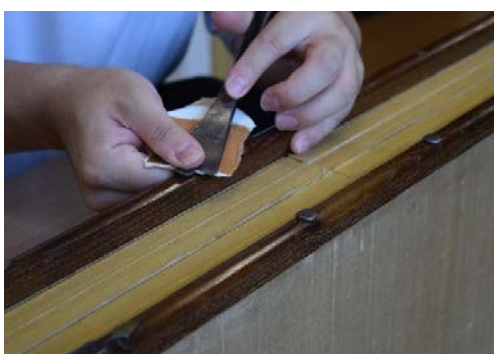
- ・右隻に比して左隻の方に、奥オゼ部分の損傷が著しい。また、裏箔の傷も多く見られる。

2. 屏風装の解体

- ・隅金物と本桑材の縁木を取り外した。
- ・蝶番部分で切り離し、各扇に分けた。
- ・縁木は修理して再使用し、下地は新調することに決まった。

＊縁木を取り外したところ、独鉚式の固定方法であった。

⇒今修理では折合釘を使った固定方法に変更する。



[金物取外し]



[独鉚式の固定法]

3. 本紙の清浄作業と彩色部分の定着作業

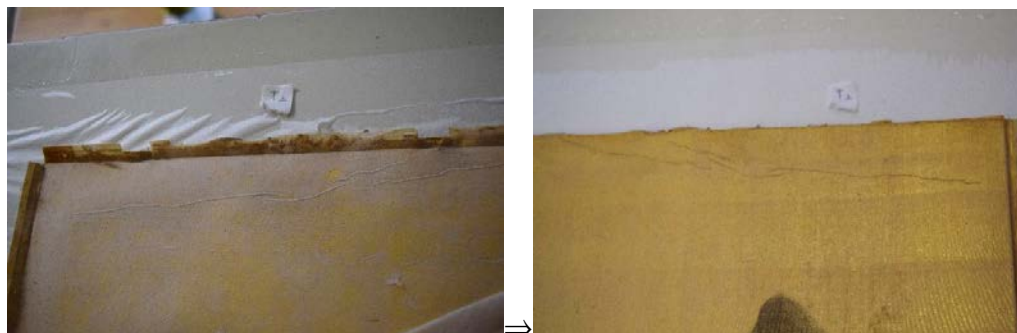
- ・本紙を下地から外し、やわらかい毛先の筆で、表面のほこりなどを払った。
- ・彩色部分と落款印に、1.5%牛粒膠水溶液を塗布(胡粉には濡色化低減の期待される牛膠水溶液を使用)し、剥落止めをした。

4. 仮裏打ちと裏箔の浮きの処置

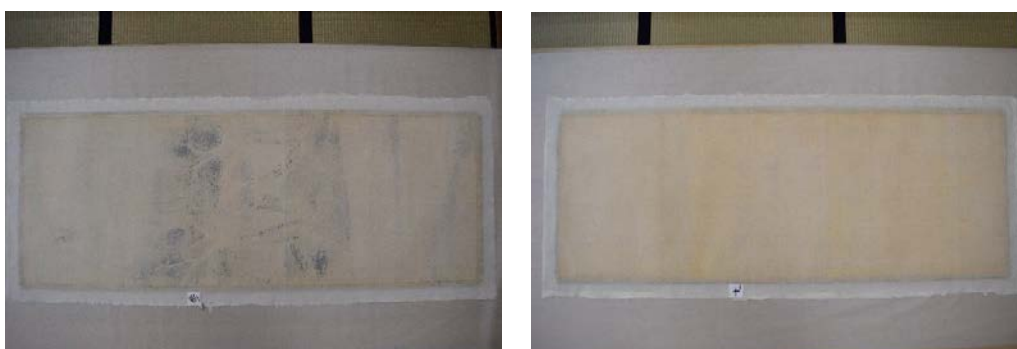
- ・旧浮け紙を除去し、化繊紙と布海苔を用いて仮裏を打った。
- ・仮裏乾燥後、オゼ界隈や豆浮き部分など絵絹と金箔の間に浮きがあるところには、3～5%牛粒膠水溶液をさし、重石で固着した。裏箔の照り・色の変化を注視しながら作業を進めた。…必要に応じて各工程の都度、膠充填&固着を行う

5. 本紙の新規裏打ち

- ・仮裏打ちを除去した。
- ・美濃紙と正麩糊を用いて裏打ちをした。
- * 元の肌裏打ち(箔押し紙?)に、細かい浮きが生じているが、大半は接着していること・現時点で肌裏紙の全除去を試みることで裏箔に変化(金箔の剥離や欠損など))を生じる可能性が高いこと、これらを理由に今修理では、旧肌裏紙の除去は行わなかった。
- ** 裏面から観察したところ、肌裏紙に墨がしみこんでいることから、屏風に仕立てられたモノに描いたと考えられる。ただし、7～12 扇では、墨のしみこみがほとんど観察されず、また肌裏の裏打ち紙にキツイ折れシワが多く、そのシワで裏箔を傷つけている。肌裏を打ち替えているのか?と推察される。



[↑裏面 肌裏のキツイ折れシワによる裏箔の傷 ↑画面への影響]



[↑3 扇 裏面からの観察(墨写り状況) ↑7 扇]

6. 本紙の増裏打ちと乾燥 (3回)

- ・美濃紙と正麩糊を用いて裏打ちし、仮張り乾燥させた。

7. 下地および裏張り絹絛の発注と縁木の修理

- ・本紙の寸法を決め、下地を専門業者に注文した。下地は、隅板を入れ力子入りの組子で組み、強度を上げるようにした。
- ・元の裏張りに似せて、絹絛を墨染め加工し、裏打ちした。
- ・縁木は、元のものを再使用するため、上下棧に部材を補填した。



[部材を補填]

8. 下地の準備

- ・下地六枚組の寸法を整え、補強および下張り処理をした。
- …骨縛り(細川紙)→胴張り(代用胴張間似合紙)→蓑掛け(楮紙)→蓑縛り(楮紙)
- ・紙蝶番(本石州紙と細川紙)を付け、六曲屏風に組み上げた。
- ・浮きを2層かけ、浮け縛りを入れた(楮紙)。



[新調下地]



[下張り作業(骨縛り)]



[下張り作業(蓑掛け後)]



[下張り作業(浮け掛け)]



[紙蝶番付け・屏風組み]

9. 上張り

- ・本紙の絵の繋がりを確認し、張込み位置を決めた(絵合わせ作業)。
 - *各扇の本紙料絹の伸縮が異なるため、絵合わせをすることで、修理前は下地小口側に折り込まれていた本紙無地部分(旧糊代の茶色い汚れが見える)を、表面に出さざるを得ないところが数か所出てきた。担当学芸員と協議し、旧糊代の汚れが特に目立つ箇所には、表面から薄絹を貼り汚れをカバーすることにした。
- ・裏の絹紐を張りこんだ。(裏張り)
- ・裏張りの乾燥後、本紙を張りこんだ。(表張り)



[絹紐の張込み]



[本紙張込み]

10. 補彩作業

- ・奥オゼの亀裂界限で、裏打紙が白く見えている箇所に、周辺色を補彩した。



[補彩作業]

11. オゼ貼り

- ・前後の蝶番部分に、化粧貼りをした。
 - …元の前オゼ化粧貼りは、折れ目で料絹が亀裂して弱まっているため、裏打ち補強し各扇ごとに分けて表面に貼りつけた。



〔 前オゼ貼り 〕



〔 元の前オゼの料絹を化粧貼り 〕

12. 縁木打ち

- ・ 折合釘を下地側に打ち込み、元の椽木を取り付けた。



〔 折合釘で縁木固定 〕

13. 修理完了

- ・ 写真撮影し、修理報告書を作成。

14. 搬入/検品

- ・ 茨城県近代美術館に、作品を搬入し、担当学芸員及び関係者の検品を受ける。

修理作業工期

令和7年4月25日～令和8年2月27日

修理事業社

泰清堂(茨城県水戸市五軒町3-3-3)

修理担当技術者

寺門泰三・寺門作楽・高島奈都美・松島志野



〔 修理後 〕

【修理前】



【修理後】



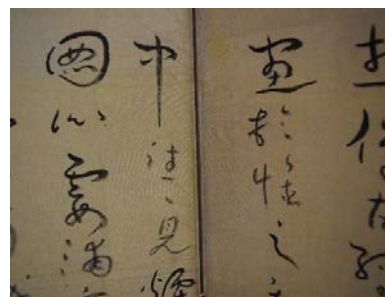
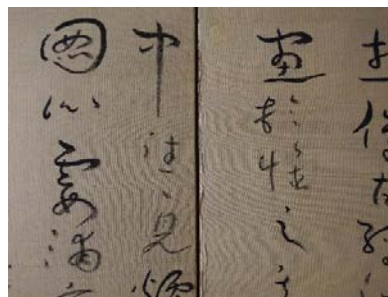
[1 扇目 隅しかみ箇所]



[2 扇目 上端豆浮き箇所]



[9-10 扇目 奥オゼ亀裂・浮き箇所]



[11-12 扇目 奥オゼ亀裂・浮き箇所]